やさしい嘘を夢見るこども

道成寺　沙耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やさしい嘘を夢見るこども

【Ｎコード】
Ｎ４６７２Ｄ

【作者名】
道成寺　沙耶

【あらすじ】
戦争の中で親を亡くした兄妹が強く生きていく物語です。しっかりものの妹とやさしい兄の切ない・ほのぼのな話です。

信じたい嘘（前書き）

ブログサイトもあります。作者ページから飛べます。サイト名は［Ｄｅａｒ＊ｄｏｌｃｅ］。足跡を残してやってくださいませ。

信じたい嘘

「ねえ、なんでお母さんは帰ってこないの」

あたしは前々からずうっと聞きたかったことをようやく聞けて、ほっとして一息をついた。けれどその刹那お兄ちゃんはぱっと怖い顔をしてあたしを振り返って、強張った顔であたしを見た。あせったような、驚いたような、そんなお顔だった。

「お父さんはどうしたの？」

もうひとつ加えて聞けば、とうとうお兄ちゃんはこっちが泣きたくなるかのような、それでいてとっても怒ってるかのような表情を浮かべてあたしの肩を強く掴んだ。痛い、と顔をあげればかちあう視線と視線。お兄ちゃんはあたしの瞳の中、その中にある何かを覗き込むかのように、ずいっと顔を近づけて、鼻先で、戸惑いを口にした。

「優奈、どうしてそんなことを聞くんだ？」

どうして、って。ただあたしは知りたかっただけなんだよ、お兄ちゃん。今朝、玄関先に置いてあったあのちいさな封筒、黒い封筒はなあに。お兄ちゃんはそれを奪い取るように開いて、それからしばらく部屋に篭もってあたしとあってくれなかったじゃない。あんなの、お父さんとお母さんが何処かへ行っちゃって以来初めてだから、きっとふたりに何かがあったんじゃないかなあ、って、思ったの。あたしはあたしを掴んでゆさぶるお兄ちゃんに向かって一言。「いたいよぅ。」はっと気づいたお兄ちゃんは急いであたしから手を退けて、「ごめんな」と感情を抑えたようにちいさく呟いた。それか

らあたしのちいさな背丈に合わせるようにしてしゃがみこんで、斜め下からあたしを覗き込むの。優奈、とお兄ちゃんがあたしの名前をもう一度呼んで、それから一呼吸分口を閉じて、もう一度からからになった喉であたしに向かって言葉を発しようとした。それがあんまりにも辛そうなものだから、あたしは慌てて、それでも聞きたい気持ちを抑えきれずに訊いてしまったの。「お父さんとお母さんはどこにいったの？」口足らずなその言葉に、お兄ちゃんはとうとう言葉詰まってそれからぎゅうっとあたしを強く強く抱きしめて肩口に顔を埋めて、あたしの髪の毛でくすぐったいんじゃないかなあってところに、頭を置いた。

それからひとつひとつ重たく区切るかのような声でお兄ちゃんはゆっくりと、まるで自分に言い聞かせるみたいに、魔法をかけるみたいな明るい空虚な声で口を開いた。

「お父さんとお母さんはな、戦争で困ってる人たちの怪我を診る為に外国を旅してるんだよ。だから、もうしばらく戻って、こない、んだ、」

語尾に行くにしたがって消えゆくちいさな声は、涙が滲んだみたいにしょっぱい声色だった。お兄ちゃんはあたしを抱きしめたまんまで離してくれなくって、少し苦しい。でも、あたしはそれを嫌がったりなんかしない。お兄ちゃんの震えた手のひらがあたしの頬っぺたをかすめていって、ゆっくり優しく撫でてくれた。お兄ちゃんはそれから暫く黙ったまんまで、そうしてもう一度、旅に出たんだよ、と言った。かなしそうな、その手のひらをそうっと掴んで、あたしは両手でそれを握り締めた。つめたい指先をあっためるみたいに、ぎゅうっとぎゅうっと。

ねえ、気づいてないんだね、お兄ちゃん。細めているお目眼が真っ赤、林檎みたいに染まってるよ。あたしは下を向いたまま震えるお兄ちゃんの背中に腕を回して、それからぽんぽんといつかお母さん

があたしにしてくれたようにやさしく叩いてあげた。眠る間際にいつもしてくれた、その仕草みたいにやさしくは出来なかったかもしれなかったけど、きっと今のあたしの気持ちを十分に伝えてくれたと思うから、それでいい。お兄ちゃんはその仕草にとうとう堰を切ったかのように、それでも声をじっと噛み殺してぽろぽろと涙を零した。それから数秒、堪えきれなくなったようにお兄ちゃんは「う、ぅ」と低い声を漏らしてわんわんと泣き出した。じいっと、自分を押し殺すその声に、今度はあたしが泣きたい気持ちでいっぱいになった。ぐっと見開いてぱちぱちと瞬きをたくさん繰り返して、お水が零れないように必死でそれを続けて続けて。ああ、ごめん、ごめんなさい。お兄ちゃんをかなしませるつもりなんかじゃなかったの。お兄ちゃんはあたしのお兄ちゃんだから、泣かないようにしてたんだよね。泣いていいんだよ、でも泣かないで。矛盾してるようだけど、それはどっちも本当なの。ねえ、ごめんなさい、いっぱい泣いて、胸の中に詰まってた涙の海をからっぽにしていいよ。ああでもやっぱりお願いだから泣かないで。あたしがいるわ。だからねえ、もう泣かないで、

「お兄ちゃんもあたしもなんにも悪いことなんかしてなかったのに、どうして、どうしてこんなに酷いことするのかな。戦争って、いっぱいいっぱいたくさんたくさん、あたしの大切なもの、持ってっちゃった」

ねえ、知ってるよ。ほんとうは旅なんかじゃないってことくらい、あたしは知ってたんだよ。お父さんもお母さんも、ふたりとも、もう。ねえ、お兄ちゃんはきっと信じたかったんだね。真実がどうであったって、お兄ちゃんはそう信じようとしてた。でも本当はそんなこと信じてなんかいなかった。それはただ小奇麗なしあわせでちいさな、泣きたくなるくらい切実な願望。それはお兄ちゃんにとっての優しい嘘。お兄ちゃんはお兄ちゃんに嘘をついていて、けれど

も嘘をついていることを知っているから、なんにもいわずに黙ってる。こうでもしなければ、泣くことさえも忘れていたね。ねえ、お兄ちゃん。もうあのやさしい腕だとか声は、もう二度と帰ってこないのかなあ。

お兄、ちゃん。

／やさしい嘘を夢見るこども

背伸びをちいさく

それはまるでちっちゃいミニチュアの世界の中、御伽噺の綺麗な箱庭。うつくしくて、儚くて、それでいて現実にはなんの意味も持たないただの玩具。飽きたらただのガラクタになってしまうのだけれど、それでもその中にはいっぱいの溢れるくらいの思い出があったの。

あたしはぼんやりと雨ばかりが落ちてくる空を見上げて、それから屋根から伝ってぽとぽとと落下してくる大粒のお水を眺めながらふうっとため息をひとつ。今日も雨。昨日も雨。明日もきっと雨。そんなふうな毎日を繰り返し繰り返していたものだから、もう当分雨を見る気にもなれないくらいに飽きてきていたところだった。つらつらと流れる雨の青い音、染み込む土のやわらかさ、それからその下に芽吹いている植えたばかりのちいさな花の芽。この庭にはたくさんの思い出が転がっていて、触れれば花開くように浮かび上がるしあわせだとか、もう戻らないせつなさだとか、そういった記憶が埋まっている。あたしがもっとちいさかったころに遊んだ壊れかかったちいさなブランコ、それからお兄ちゃんと一緒に砂のお城をつくったこじんまりとした砂場の跡。今はもう野菜をたくさん植えてるから、そんな面影なんてどこにもないけど、それでもあたしには大切な思い出ばかりが落ちているあたしのお家。ときどきこうやってあたしは昔のなつかしさに触れて、それを忘れないように頑張っている。忘れたら、きっと忘れたことも忘れて永遠に思い出せなくなって、それからその思い出がなくなってしまうから。それはきっとかなしいことだと思うから、だからあたしは数え切れるだけの思い出を手のひらに抱えて、覚えていようと思う。いつか大人になっても、昔を思い出してわらえるように。

たとえばそこにある、少し焼け焦げた戦火の跡を残すブランコ。わくわくしながらそれに座って脚を振って、それでも中々動かなかったブランコを、見かねたお父さんが少し笑ってあたしの背中を押してくれた。ふわっと宙に浮いて空が近くなって、青がいっぱいあたしの中に納まりきらないくらいに溢れかえって、いつまでもいつまでも飽きることなくあたしはそれを眺めて遊んでいたこと。今度はお兄ちゃんが精一杯あたしの背中を押して、嬌声を上げながら二人で高さを比べあっていたこと。しあわせで、まだ炎が町を包み込む前の些細なお話だ。それでもあたしはこの風景を忘れない。これはきっとあたしをつくる骨組みになっているようなしあわせな根源で、きっとなくなってしまったら困る、どうにもいいようもないけれど、きっと困るだろうと思うのだ。だから、たとえ全てが焼き尽くされてしまってもあたしは諦めないの。兵士さんが壊してしまっても、爆弾が焼いてしまっても、いつまでもあたしの心に仕舞われているから、きっと大丈夫。

「優奈、いってくる」

ぼんやりしていると、後ろからお兄ちゃんが慌しく足音を響かせながら、あたしに声を掛けた。お兄ちゃんはお母さんたちを失くしてから、最近ちいさな工場で働きはじめたばっかりだ。まだやりはじめて日が浅いから、いつもお兄ちゃんは疲れきった表情をして過ごしている。それでもお兄ちゃんはあたしと話すときには楽しそうに笑ってくれるし、毎日帰ってくるとあたしの頭をやさしく撫でてくれて、「ただいま」って言ってくれるの。それがあたしは大好きで、内緒だけれどどんなにお兄ちゃんの帰りが遅くったって決して寝ないでその手のひらを待ってる。撫でられるとどうしても笑っちゃうから、ほんとうは気づかれているのかもしれないけど、それでもお兄ちゃんはやさしいからなんにも言わない。

「お兄ちゃんおべんとーは？」
「あっ、やべ、忘れてきた」

そそっかしいところもお兄ちゃんのいいところで、あたしはそれすらも大好きだと心から言えるのだ。お兄ちゃん。お兄ちゃんはほんとうに優しい。ほんとうは、あたしを孤児院にいれて一人暮らしをしたっていいと思う。あたしを見ず知らずの親戚に預けたってよかった。でも、お兄ちゃんはそうせずに、自分で妹を育てるって決めて、あたしを大切にしてくれる。だから、あたしはお父さんもお母さんもいなくったって、寂しくなんかない。ほんとうに寂しくないのかといわれればそれは答えられないけど、不幸かって言われたら誇らしく否定できるの。

「はい、お兄ちゃん。お兄ちゃんはあたしがいないとだめなんだからー！」
「はは、ごめんごめん、ありがとう、優奈」

あたしはわざとらしくもったいぶった仕草でお兄ちゃんにお弁当を渡す。ほんとうは、その言葉は嘘。あたしがお兄ちゃんがいないとだめなの。でもちょっとだけ自慢してもいいよね？あたしはお兄ちゃんの助けに少しでもなってるって思ってもいいよね？たとえばそのお弁当、まだ作り始めたばっかりで、形も味もよくなんかないけれど、それでもお兄ちゃんは文句なんか一言も言わないで食べてくれる。あたしが焦がしたところだとか、生焼けだったところも、優奈らしくておいしかったよって褒めてくれるの。あたしはその言葉を聴くと胸がきゅうってなって、しあわせで、それからすこし寂しいような不思議な気分になった。お兄ちゃんはちょっと、ううん、すっごく無理をしていると思うの。まだお兄ちゃんだって子供なのに、あたしというもっと小さな子供を抱えているから、お兄ちゃん

は子供のまんまじゃいられなくなった。あたしのほごしゃ、お父さんの代わりになんなきゃいけなくなった。だから、いっつも背伸びをして、もっと自分をおとならしく見せようと努力してる。ほんとうはお兄ちゃんだって子供で、もっと甘えたっていい年なのに。

「お兄ちゃん」
「？」
「えーい！」
「うわ、なにすんだよ優奈、痛いじゃねーか！」
「えへへへへー」

ねえ、お兄ちゃん。あたしはそれがちょっぴりかなしいの。だから、すこしくらいいたずらをして、たとえばこんなふうに抱きついたっていいでしょうお兄ちゃんが着てる工場のつなぎの服はすこしだけ機械の油の匂いもしたけれど、あたしはそれすらもお兄ちゃんの一部だと思うから、そのにおいも好きよ。だいすき。いつかお兄ちゃんがおんなのひとを連れてきたときも、ちょっと、ううん、やきもちだって焼くかもしれないけど、それがお兄ちゃんの選んだひとなら、あたしはそれを祝福するよ。

「今日もお土産買ってくるからな」
「いいよう。いらない、だってお給料前なんだもん。もったいないよ」
「ばか。お前は子供だからそんなこと考えなくたっていいんだよ」
「でも、お兄ちゃんだってこどもだよ」

ねえお兄ちゃん見て。この家にはたくさん思い出が蓋をされてたくさん埋まってるよ。これからもっとたくさん思い出をつくって、この家を埋めていこうね。失ったものはあんまりにも大きくて、それはもう穴埋めなんて出来ないけど、それでもそんな歪なしあわせだ

っていいと思うの。

爪先で背伸びしたお兄ちゃんはまるでおとなみたいに責任だとかかなしみを背負って一人前に世間に出たのだけれど、こどもが大人になるってことは辛いことだとあたしは思う。だって、大人は簡単には泣くことだってできないし、大人になるってことはいろんなものを忘れてしまうことだって思うから。そうでしょう？だから、おとなになるのがそんなふうにかなしいことなら、お兄ちゃんは一生こどものまんまでいいと思うんだ。だって、こどもだもん。あたしもお兄ちゃんもまだちっさくて、しあわせを与えてくれるおとなを求めてるこどもだから。だからお兄ちゃんはそんな風な背伸びをしなくったっていいんだよ。なんでもおとなの考えになればいいってものじゃないんだから。お兄ちゃんはこども。あたしもこども。肩を寄せ合って生きてる、ただのちいさなこども。きっとそれでいいんだと思う。かなしくて、埋もれるくらいにかなしくて、それでもあたしたちは生きている。いきてる、から。

いつか争いのないまっさらな世界になったら、この小さな窓から顔を出して、新しくなった広い世界を覗き込んで、それから笑おう。そのときまであたしは待ってる。がらんとした誰もいないこのからっぽのお家も、痛みも、懐かしさも、全て思い出に変えて、ずっと待ってる。もう誰かを失ったりなんかしない世界を待っているから。この戦が全部全部終わって、そうしてあたしが大きくなったら、もう一度向かい合おう。

そのときまで、さよならかなしみ。

花唄（前書き）

ブログがあります。作者紹介ページからどうぞ。

花唄

ゆるゆると閉じられた瞼の裏に映りこんだのは鮮やかな春の色。それを追いかける暖かな風が背中を通り越してどこまでも遠く遠く花びらを運んでいって、どこまでも届くのだろう、きっとその花はいつか世界中を廻って新たな命を息吹かせるのだ。春の日差し。柔らかな温度。それから花のぬくもり。はらはらはらはら散る花雪、桃色の空を駆け巡る幸福の音は、巡り巡ってこの世界に満ちていく。春の息吹。踏みしめる花の道。すべてすべて包み込んで、青空はしあわせを唄った。

花唄

終戦というひとつの結末を迎え、この国は新たな一歩を焼け野原に踏み出すこととなった。第三次世界大戦の傷跡は重く国民に国に圧し掛かり、被害も損害も並々ならぬものであったが、それでもこの戦は終わったのだ。戦いを象徴する武器は投げ捨てられ、軍を掌握していた大臣もクーデターに遭い没落、国民の支持を得た平和民主党のトップが華々しく国を飾った。そうしてこの国は、ようやくの平穏を取り戻すことができたのだった。平和。安楽。そんな言葉を知らぬ子供も数多くいた。親を知らぬ子もたくさんいた。それでも彼らにとって終戦は希望の幕開けであった。この広い広い空を埋め尽くす戦闘機の影はいまや何処にもなく、ただ戦争を見知らぬ青が顔を出して、ほんとうの青空をめいっぱい主張するかのように快晴の兆しを見せていた。それは軍事主義の終わりを示すものであり、かつての日本国の象徴であった平和・非核・国民主権を取り戻した日本は見る見るうちに国の状態を整わせていった。平和を望まぬも

のなど何処にもいない。しあわせを望まぬものも何処にもいない。戦争は終わったのだ。もう怯えることなどない。終戦の合図のラジオを見た若者たちは一斉に叫びを上げ、それからありったけの酒を持ち出して大勢の人間にかけあった。馬鹿のように騒いで騒いで、そうしてそれを実感したのだ。叶わなかった白日の下での生活。それから血を見ない日常を。

潤う彼らの心の中は光に満ち溢れた、うつくしい色。鮮やかに眼を焼く命の色。死にゆく赤はもう見えない。ただそこにあるのはまっさらな虹色の世界で、望んでも得られなかったしあわせの色をしていたのだ。

「お兄ちゃん、見て」

あたしはお部屋のカーテンを思い切り広げて降り注ぐあたたかな日差しを全身に当てて、それから振り向いてわらった。春の日差し、その匂いにつられて微笑む花の色がうつくしくて、目も開けられないくらいに光が眩しくて、それでもあたしは目を閉じずに笑う。お兄ちゃんもあたしの横に立って、それからあたしの肩をそうっと抱いて、感極まったかのようにゆっくりと声を漏らした。

「ああ、…空が青いな」

見上げればいつも重たい鉛が飛び交っていたかつてのあの空は、もう何処にもいない。かわりに訪れたのは見たこともない青さ、それからその広さだった。お兄ちゃんはすこし涙ぐんだかのようにぐずっと鼻を鳴らして、それから優奈、とあたしの名前を呼んだ。それが嬉しくて、あたしはお兄ちゃんの腕をぎゅっと掴んで、ぐいぐいと振り回した。それからくるっと一回転して、両手を空に掲げる。伸びた栗色の髪があとを追ってふわっと回って、それからふんわりとあたしの肩に戻ってきた。なんだかすっごくどきどきする。不安

だからっていうわけじゃあなくって、もっとわくわくするかのような、そんな風な胸の高鳴りがする。それは決して嫌な感覚なんかじゃなくって、ううん、すごく嬉しい感じなの。ねえお母さん見て、優奈はこんなにおっきくなったんだ。だって、こんなに空が近いもの。今にも落ちちゃいそうなくらいまあるい空はきれいできれいで、あたしは初めてこの空がうつくしいんだってことに気づいたよ。いつかお父さんが肩車をしてくれたときのことを思い出す。あのときも楽しかったけれど、今はもっと楽しい。隣にはお兄ちゃんがいて、それから大切な思い出がいて、それから。

「優奈、外へ出ないか」
「うん！」

あたしはお兄ちゃんの提案に喜びながら飛び跳ねて、急いで玄関から靴を履いて外へと飛び出した。靴に脚を突っ込んだっていったほうが正しかったから走りにくかったけれど、それでもあたしは止まらずに走って走って庭へ出た。あとからお兄ちゃんが追ってきて、苦笑するように「靴はちゃんと履けよ」と言った。はーい、と気もそぞろに返事をすると、あたしは庭の澄んだ空気を胸いっぱいに吸い込んだ。おいしい。空気ってこんなにあったかかったっけ？そうして空をもう一度見上げると、目の先にふわりとなにかが飛んでいくのが見えた。なんだろう。気になってそれにあわせるように目を横にずらすと、それは薄い桃色をしたちいさな何かだった。ふわりふわりとそれは風に煽られながら降下して、青々とした庭の芝の上に落ちる。それをそうっと人差し指でつまんで、目の前に掲げた。やさしいピンクの、可愛い破片みたいなものだった。

「お兄ちゃん、これなあに」
「ああ、優奈は知らなかったのか？桜っていうんだよ。日本の国花なんだ」

「さくら？」
「ああ。綺麗だろ？春になると、たくさんたくさん咲き出して、花びらを飛ばすんだ」
それはまるで希望を飛ばすかのように、空気に乗せて届く花。あたしは初めて見たその花に夢中で、どこから飛んできたんだろうとあたりをきょろきょろ見渡した。この近くにはそんな木、一本もないのになあ。

「優奈、それより、あれ」
「え？」

お兄ちゃんが楽しそうに微笑んであたしの後ろを指差した。何かと思って振り向くと、去年植えたばかり花壇、そこはちいさな芽が花開いていた。みどり。緑の生き生きとした色を芽吹かせ、それはあたしたちに自慢するかのように誇らしげにつんと上を向いて立ちすくんでいた。あたしは駆け寄ってその前にちょこんとしゃがみこんだ。好奇心だとか、興味だとか、そんなものがない交ぜになってあたしの胸を突いていく。これは確か、去年の冬にお兄ちゃんと一緒に植えた球根だ。あの時は硬くって茶色くて、ただの塊みたいだったのに。なのに、芽を出した。まっすぐな芽を。あたしは嬉しくて嬉しくて、ぱっと後ろを振り向いて、笑っているお兄ちゃんに向かって叫んだ。

「すごーい！お兄ちゃん見て見て、芽が出たよー！」
「優奈が頑張って水をあげたからな」

戦火の下、射撃を受けないように注意しながらこっそりとあげてい

た水。あまりに空襲が激しくなってしばらく様子をみることが出来なかったのだが、それでもその植物の生命力はすさまじかったのだ。人の手を借りずとも、こうして芽吹いた。逆境にも負けず、たっひとりで。

「お母さんたちもきっと喜ぶね！」
「そうだな。優奈、公園の桜を見に行くか？きっと今頃満開だぞ」
「わあ！いくいく！連れてってー！」

きゃあきゃあと無邪気に叫ぶ妹の手を引いて、少年は鼻唄まじりに明るく咲き誇る春の道をゆく。道であうひとたちの笑顔を見ながら、ちいさなぬくもりの手を離さないようにしながら、桜の木を目指した。はらはらと舞い散る桜の花びらを辿るように。

こんにちは、いとしい世界。
初めて見たまっさらな雲ひとつ無い青い空は、しあわせの花が舞っていた。

花唄（後書き）

よろしければコメントをどうぞ。

夢と現実、存在する価値

その緩やかな残像があたしの目に焦げ付いて網膜を焼いた。あたしの目の前で、倒れた、その体を。

夢と現実、存在する価値

どこかよそよそしさを感じさせる病室の白、それから生気の抜けた彩りを欠く肌の白、それとは打って変わって持ち主とは対照的なまでに生き生きと咲き誇る花弁の白。この部屋は白ばっかりだ。壁も、カーテンも、着るものも、そこにいる人たちだって、みんなみんなみんな。あたしはその白が憎くて、けれど不安を掻き立てるようなその色にすがるように、じっと頭を下げていた。しばらくするとさっきのお医者さんがやってきて、白い椅子を指差して、穏やかな声であたしに呼びかけた。「座っていて良いですよ」それにあたしは弱弱しく頷いて、そっとちいさな椅子に腰掛けた。手のひらをぎゅっと膝の上で重ね合わせて握り締めて、それから目を覚まさないお兄ちゃんの顔を一瞥して、また膝の上に視線を戻した。お医者さんはすこしふっくら太った恰幅のよさげなお腹の上にある銀色の（なんだったのかな、確か、心臓の音を聴く道具？）を手にとって、お兄ちゃんの薄く上下する胸に押し当てた。ふむ、と意味ありげに呟いた言葉があたしに突き刺さる。もしかして、駄、目？駄目なの、駄目だったの？とはやる気持ちがあたしの胸に冷たく冷たく押し当てられて、まるであたしが心音を計られてるみたいだった。数秒、ぽん、ぽんと場所を変えて動かされた、たしか聴音器とか言うその道具。それをお医者さんはお兄ちゃんの体から離して、それからあたしに向かってすこし微笑んだ。「大丈夫ですよ」その言葉にどん

なにあたしが救われたことか。お兄ちゃんの顔をまじまじと見つめて、それからそのお医者さんの顔を見つめて、あたしはその胸に嵌められた金字プレートの文字に初めて気づいた。しらいし　りょういちろう、とひらがなで１１個の文字が慎ましく躍っていた。きっとちいさな子供を担当しているに違いない、もしくは目の衰えた老人かもしれない。そんなふうに気遣われた文字だった。あたしはそのプレートから目を上げて、恐る恐るしらいし先生に尋ねようと口を開いた。けれどもその口はただ開いたばっかりで、目的を果たすための声が出てくれないのだ。ぱくぱく、ぱくぱくとあたしが酸欠の金魚みたいに口を開け閉めしていたら、先生はそれよりも先に唇を開けて喋ってくれた。

「お兄さんは大丈夫ですよ。命に別状はありません。ただちょっと疲れがたまっていたということと、それから熱射病の脱水症状が出ているだけです」

「ねっしゃ、びょう？」

「ええ。暑くて暑くてたまらないと汗が出るでしょう。そんなときに水分を取らないと体のなかの水が足りなくなって脱水症状を起こすんですよ」

「じゃあ、お兄ちゃんは死んだりしないの？」

「しませんとも」

今はね、と口の中で呟かれた言葉をあたしは敏感に感じ取って、がばっと立ち上がってお医者さんを真っ向から見上げて、必死に枯れた声で叫んだ。

「今は！？じゃあお兄ちゃんは、お兄ちゃんは、」

「菅原さん、落ち着いて。此処は病院ですよ」

「あ・・・・・・」

周りを見れば、仕切られたカーテンの隙間越しに他の患者たちがうろんげにこちらを見ているのに気が付いた。あたしはすこし反省して、それからちいさな声でもう一度先生に尋ねた。

「いまは、って、どうゆうことなんですか・・・・？」

「今回は無事に病院に運ばれたから大事には至りませんでしたが、これ以降また同じような環境で働いていたら、また熱射病にかかる可能性が高いのです。これからはきっちりと気を付けて、仕事を少し休んだほうがいいでしょう」

「しごとを・・・・やすむ・・・・」

「仕事場のほうには私が連絡しておきましょう。労働基準法に触れますよ、と脅しておきますから大丈夫です。だから今は安心して、お兄さんの世話をしてあげてください」

ここは涼しいですしね、とわざと茶化すように明るい口調で言うと、お医者さんはあたしに背を向けて立ち去ろうとした。それを追いすがってその白い裾を掴んで、驚いて振り返る先生に恐る恐る問いかけた。情けないと思うのだけれど、けれどこれだけは気になる。だって、あたしたちにはもうお父さんもお母さんも、いないのだから。

「あの、その・・・・お金は・・・・・・」

「ああ、大丈夫ですよ。私たちも子供からはお金をせしめようだなんて思ってませんから」

「ありがとう、ございます・・・・・・」

涙ながらに呟いたあたしの頭の上に、大きな手のひらが被せられた。何かと思ってみれば、それは先生の右手で、あたしがそれにまじまじと見入ると先生はぱっと花開くかのように拳を開いて、中のピンク色の愛らしい包装紙に包まれた小粒の何かを差し出した。思わず受け取ってみれば、それは外国語で何かを書かれたキャンディだっ

た。先生は優しく微笑んで、「あげましょう。落ち着きますよ」とあたしの頭を撫でてくれた。嬉しかった。涙腺が緩むのを感じながらも、それでもあたしはまっすぐに先生の瞳を見て、「ありがとうございます」と繰り返した。御礼と挨拶は大切なのよ、といつだったかあたしに教えてくれたお母さんの影をそこに見た。嬉しかったし、・・・・ともかく嬉しかったので、あたしはなけなしの笑顔で微笑んだ。先生はひとつ頷いて、それから振り向いて病室を出て行った。ばたん、と白い扉が閉じられると同時にあたしは肩の力を抜いて、はあ、と椅子につっぷした。気が抜けた感じがした。

「おにい、ちゃん」

呟けば随分と疲労したあたしの声が耳にはいった。情けないなあ、と思いながらも、あたしはそっとお兄ちゃんの白い管を通した手のひらを掴んだ。やわらかくて、けれどもやっぱり男の人だと思える大きな手が、ぬくもりをささやかにあたしに分けてくれた。それに安心しながらも、あたしはお兄ちゃんの手をより一層強く両手で握り締めた。まるで、そうすれば返事が返ってくるとでも思っているかのような、懇願するかのようなそれに気づきながらも、あたしはそれを止めないでいた。ざわざわ、かつての軍の放送ではない自由な放送のテレビ、それからカーテン越しに伝わってくる同室の兵士さんたちの話し声が不思議と一致したＢＧＭのようにあたしたちを包んで、日常の最中に置いてきぼりにされていた。寂しいのか安堵したのか分からなかったけれど、ともかくお兄ちゃんは無事なんだから、とあたしは自分を勇気付けるようにぐっと拳を握って、だいじょうぶ、と口の中で呟いた。だいじょうぶ。優奈はいい子だから。だいじょうぶ、優奈は心配しなくっても大丈夫。お兄ちゃんは、もう何処にもいったりなんかしない。そう思いこんで、あたしはあの衝撃を思い出した。お兄ちゃんが、くず折れる瞬間を。かつての第三次世界大戦で、銃撃された兵士たちをいっぱい見てきた。あの無

言の瞬間を、あたしはきっと一生忘れられないだろう。あの、声にも出せない恐怖。一瞬にして何もかもが奪われてしまう恐怖。まるで、あの日お父さんとお母さんを見送った日の誰もいない家の暗さを思い出させるような辛さ。失うだなんて思ってもいなかった、ずっとこのしあわせが続くと思ってた。なのに。なのに、現実は残酷で残酷で、あたしとお兄ちゃんから二人を奪い、飼い猫のリンを奪い、おじいちゃんも、親戚も、友達も奪い、それから最後にあたしの心を奪っていった。えぐるかのように歪んだ先っぽのナイフで切られたような、痛覚に富んだ思い出を残しながら。

あたしは握り締めた手のひらの指を一本一本ゆっくりと開いて、その中にある暖かなピンクを覗き込んだ。ころころと手に優しい触感を残すそれはきっと味もやさしい甘さなんだろう。あたしはその裏が銀色になっているキャンディの包み紙をそっと広げながら、その中身を見た。銀紙の色に相応しく可愛らしい赤、ピンクの色をしたまあるいつやつやの飴。それを口に放り込めば、甘い、とろけるようなしあわせな味が口いっぱいに伝染した。その優しさを嬉しく思いながらも、あたしは、お兄ちゃんが倒れたときのことを思い出すことにした。

――お兄ちゃんがバイトを増やすことになったのは、この初夏の事だった。戦争がようやく終わって、ばらばらに崩れた建物の撤去、それから建築の作業員が必要になったということで、その人員募集がかかったのだ。お兄ちゃんはこれ幸いにと、夜は機械工場、昼は土木建築の仕事を重複して行うことになった。お兄ちゃんはろくに寝てもいなかった。たまにあたしがお弁当を渡しながら大丈夫かと尋ねても、お兄ちゃんはいつでも変わらず同じ言葉をあたしに掛けてみせた。

「大丈夫だよ。優奈はなんにも心配するなよ」

するよ、するんだよ、ばかばかばか。ばかお兄ちゃん。あたしはいつだって心配だったんだよ。だって、知ってる、分かってるもの。あたしの所為でお兄ちゃんはこんなにまで働き詰めになってるんだってこと、理解してるもの。お兄ちゃんはいつだってあたしをかばってあたしの為に生きてきた。今までずっとそうだった。お兄ちゃんは欲しいものがあったって我慢したし、行きたかった学校にだって行けなくった。それでもお兄ちゃんはあたしを責めることもなく、あたしに向かって微笑んで、あたしを抱きしめてくれていた。だから、あたしは気づかなかったのかもしれない。此処最近お兄ちゃんが特に無理をしていたのだということを。お兄ちゃんは帽子を持っていなかったから、きっとこの真夏の直射日光を浴びて辛かったはずだ。そうして、水も飲まずに働いて働いて、この結果だ。あたしは酷い罪悪感とそれからあたしの存在の邪魔さを嫌というほど脳内で反復して繰り返して、酷い自己嫌悪を嵐を吹かせていた。そうすると見る見るうちにあたしのろくに機能もしない目頭はきゅうっとあつくなるものだから、あたしはぎゅっと目を瞑って、あるいは真上を向いて瞬きをしきりにしないと零れ落ちてしまいそうなその雫をずっと押さえ込んで、喉の嗚咽を押しつぶしてそれに耐えた。

「お兄ちゃん、ごめんね。・・・・・ごめん、ね」

そう呟けば、あたしの罪悪感も一気に増して波のようにあたしの心をゆらゆら揺らした。まるで風吹く切り立った崖の上にいるみたいだ、それはあんまりにも危なっかしくてか弱い位置であって、けれども一歩も退く場所の無い不安定な場所。あたしはその謝罪の言葉に全てをかけて、心の底から謝った。謝ったからって何か変わるわけなんかじゃなかったけれど、それでもあたしは謝った。そうすれば、また、「気にするなよ」って優しい言葉をかけてもらえるんじ

ゃないかって浅ましくも期待して。ああ、馬鹿みたい、ううん、馬鹿だ。あたしは馬鹿なこども、お兄ちゃんはその被害者。あたしっていう重りさえなければ、お兄ちゃんは何処にだて羽ばたけていけたはずなのに。・・・はず、だったのに。

あたしはもう一度、お荷物でしかないあたしの立場を考え直すこととした。あたしはお兄ちゃんのおまけみたいな存在なのに、そのくせお兄ちゃんよりも消費だとかお金を使わせてる。あたしをどうにかしなくっちゃ、あたしの所為でお兄ちゃんは苦労してるんだと思ったら、ほんとうに、辛くて、胸を刺しぬかれたみたいに冷たい痛みが何度も何度も心臓に合わせるかのようにあたしの心をざくざくに切り刻んで地面に放った。病院の効きすぎたクーラーがやけに凍えるように寒くて、気がつけば鳥肌さえ立っていた。あたしは長袖だっていうのに。あたしは目を閉じて、願うように祈るように何処とも知れない神様にお願いした。あたしはもうお兄ちゃんの脚を引っ張りたくない。せめて働いて、お兄ちゃんを助けたい。その気持ちであたしのちいさな胸はいっぱいになって苦しくて苦しくて、それでもあたしは願った。そう、何かしたかった。何でもいいから、あたしはお兄ちゃんを助けたくて。あたしはお兄ちゃんのポケットから仕事の連絡用にと支給されたちっぽけな携帯電話を取り出した。それから、カーテンでこちらが見えないのをいいことに、あたしはその場で電話をかけようとそのスイッチを押した。

「ぜろ・・・ろく・・・・・きゅう、の・・・」

プルプルプル。コールの音さえもどかしく、あたしは気をせぎながらその携帯にぴったりと耳を当てて、工事現場の監督さんが出るのを待った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ん・・・・・・？」
ふわりと重たい頭が覚醒しようと動き出して、俺はそっと眩しい光に辟易しながらも目を開けた。するとその瞬間目に入ったのは最愛の妹の姿であり、優奈は俺を見て息が詰まったかのように沈黙して、それから泣き笑いのように微笑んだ。きっと泣き顔を見せたくなかったんだろう。優奈、と呼びかけてやれば、途端にその表情は崩れて見る見るうちに顔は紅潮して、目から今にも涙が零れそうだってくらいの表情を浮かべた。お兄ちゃん、と涙声で俺の手を握る妹の白いちいさな手のひらをぼんやりと眺めながらも、俺はどうしてこうなったのか、という経緯を頭の中で辿った。たしか今日は昼過ぎまで急ピッチでの仕事を行っていて、喉が急に渇いたと思ったら、いきなり視界が暗転して。

「お兄ちゃん、仕事ちゅうにねっちゅうしょうでたおれたんだよ。・・・だいじょうぶ・・・？」
「ああ。大丈夫だよ。優奈、心配するな」

魔法の言葉みたいに、俺はずっとこの言葉を繰り返し繰り返し使っている。そうすれば、きっと優奈も安心してくれるのではないか、そんな思いを込めたその言葉は、いつだって同じように優奈の表情を緩ませた。けれど今回はどうにも違うようで、優奈はその言葉に幼い顔を歪めて、それからお兄ちゃん、と苦い声で口を開いた。

「どこがだいじょうぶなの？」
「え、」
「どこがだいじょうぶだっていうの。いつも、いつも、あたしにはだいじょうぶだいじょうぶって言ってばっかりで、！ほんとうはお

兄ちゃんはだいじょうぶなんかじゃなかったんでしょ！？いつもいつもそうやってあたしをだまして！言ってよ、だいじょうぶなんかじゃないって！あたしに、すこしくらい頼ってくれたって、・・・・っ」

後半は涙でもう聞き取れなかったその言葉に。堰を切ったようにあふれ出す優奈のその言葉に、ぐっと胸が締め付けられた。気づかれていた。大丈夫大丈夫だといい続けて、それでも隠し切れなかった疲労だとか、黒く固まった暗い思い出だとか、そういったものを隠していたのを、優奈は気づいていたんだ。もう何もいえない俺に向かって、優奈はとうとうぽろぽろと涙を振り落としながらも、必死に言い募った。

「だって、あたしが、あたしばっかりお兄ちゃんの負担になって！いつもいつもあたしの所為でお兄ちゃんは苦労ばっかりしてる！あたしだって働きたくてお兄ちゃんの工事現場に電話してみたけど、子供だからって断られた！あたしが、子供で、女の子じゃなかったら、お兄ちゃんを困らせることなんて無かった、のに。あたしはお兄ちゃんの邪魔ばっかりしてる。あたしが、あたしさえいなければ、お兄ちゃんは苦労なんてしなかったのに・・・・・！！」

その切り裂くような悲痛な悲鳴に、俺はぐっと唇を噛締めて、それから震え嘆く優奈の肩をそっと、けれど強く抱いた。ひくひくと嗚咽を漏らして零れていく涙が病院のシーツに染み込んで、まあるい灰色の染みを描いていく。俺はそのちいさな、頼りない肩を抱き寄せて、その栗色の頭をやさしく撫でた。そうすればまた一層に涙が浮かんでシーツに沈む。俺は出来る限りの優しさを以って、妹に語りかけた。

「お前は俺の負担になんかなってないよ」

その言葉は限りなく本当で。本当にそう思っているからこそ臆面もなく言える言葉だった。だって、ほんとうだ。ほんとうに、俺はそう思っているのだから。言葉を続ける俺の顔を涙に濡れた妹が見上げる。可哀相に歪められたその目元の涙をそっと親指でぬぐって、俺は力いっぱいに優奈を抱きしめた。ちいさくて、儚くて、けれどしっかりしたその優しい重みと体温が染み込むように俺の体を伝わっていった。ああ、生きているんだ。そう確認できた。なにもかも失って、それでもこの暖かさだけは俺を支えてくれた。この暖かさだけが、俺の生きる理由、生き甲斐だっていうのに。

「俺はな、優奈の為に働いてる。けど、優奈の所為で働いてるんじゃなくって、優奈が大切だからそうしてるんだ。やらされてるんじゃない、負担になってるんじゃない、お前が此処にいてくれているから俺はこうして働けるんだ。お前がいなきゃ、俺はもう働く意味も、生きてく意味だってないんだ。お前だけが、俺の大切な家族なんだから。だから、無理なんかしてない。確かに疲れているときだってあったけど、それでも優奈の顔を見ればしあわせな気分になれたよ。お前は、俺のたったひとつの生き甲斐なんだよ。だから、・・・だから、そんなこと、言うな。俺はお前が何よりも大切なんだ。お前はお前であればいいんだ。働かなくたって、なんだって、お荷物なんかじゃない。お前は俺の宝物みたいなものなんだよ。だから、お前といれてしあわせなんだ。・・・・・・・ほら、泣くなよ。せっかく母さんが可愛く産んでくれたってのに、それじゃあ台無しだぞ」

「お兄ちゃんは・・・・・あたしが、邪魔じゃない？」

「ばか。邪魔なわけあるか！むしろ、ずっと傍にいて欲しいよ。優奈。だからもうそんなこと考えなくたっていいんだ。お前はただそこにいるだけで俺を癒してくれるんだから」

「うん・・・・・・・、うん。あり、がとう・・・・・・・」

はらはら、開いた妹の手から可愛いしあわせそうなピンク色の銀紙がひらりと白い床に舞った。俺は抱きついてくるそのぬくもりに深く安堵しながらも、その背中に腕を回して思いっきりその形を確かめるかのように抱きしめた。ああ、あたたかい。父さん、母さんがくれたいつかのあの暖かさにそっくりな酷くせつないぬくもりの味。それを噛締めながらも、俺は口を閉じた。もう言葉はいらなかった。ただ、このぬくもりさえ存在してくれているのならば、それで構わないと俺は魂の底から思った。それから目を閉じた。やさしいしあわせの匂いが漂う昔の記憶をなぞらうように、ただ、俺は黙って、その体を抱きしめることだけに専念をするのだった。

Hello and good－bye

捨てたものと拾ったもの、どっちが大きいの？

Ｈｅｌｌｏ　ａｎｄ　ｇｏｏｄ－ｂｙｅ

丁度その日はどしゃぶりの雨だった。工場も休暇、町は沈んで中々上昇してこない暗鬱とした空気、それでもどこかしっとりと懐かしさを催すかのような湿った空気が二人の家を支配していた。古ぼけた、少しだけ戦火に煤けた二人だけのその家にはたくさんの思い出が詰まってぎゅうぎゅう詰めに押し込まれて溢れかえっている。その家には今は一人しか佇んでおらず、寂しげに雨に打たれるばかりだった。先ほどから妹、一優奈は雨に晒され続けた花壇の様子を窺いに外へと出ている。だが彼女が出かけていてもう１０数分も経っているのだ、まだなのだろうか？彼は不審に思いながら外を見た。さあさあと小気味よく打ち付ける雨、雨、それから雨。とにかく雨ばかりがこの空を支配したがって顔を覗かせて宙から振り落とされている、あとはただ少しの冬風が舞うだけだ。最低気温も最高気温も余り変わらず、湿度も最高を迎えている。冬の長雨は暗く、それでいて蒸し暑さを伴わない情緒のあるものだ。彼は妹の後姿を少し思い出す。ピンクのレインコートに同色の長靴、それから誕生日にプレゼントした、真新しい空色とオレンジの花が咲いた下地に、鮮やかなてんとう虫が刺繍された可愛らしい傘。それを意気揚々と翳して歩く妹の姿を思い描き、ゆっくりと目を閉じる。あれは中々に迷った品だった。あの時、予算と現実がかち合わずに困り果てて品を見つめる少年に、ちょうど初老の老婦人が声を掛けてきたのは偶然だったのだろうか、それから恋人にプレゼントするの？と訊かれ

て真っ赤になって、妹のものです、と慌てて否定した少年に、老婦人は快くお金を足してくれたのだ。いい服を着ていたことから、裕福な婦人だったのだと窺えた。彼は彼女に深々と礼をいい、それからお金を将来的に返す為の連絡を取るための住所を聞いた。だが老婦人は断って、それから少し寂しげに笑ってこういった。「あなたは死んだ孫にそっくりだもの」戦争で死んだというその孫と似通っていた少年は、頭を下げた。戦争中はみんな冷たかった、こんな子供に金をやるだなんてあの頃は考えられなかったのだろう、けれども今は。「ありがとうございます」繰り返し繰り返して少年はその言葉の意味をじっくりと噛締めるのだった。

「優奈、遅いな・・・」

その間にも既に更なる10分が加算されていっている。もうそろそろ戻っていい頃合なのだが。まさか、増水した川でも見に行って流されたんじゃ・・・。彼はその恐ろしい考えに身を突き動かされて立ち上がった。それからレインコートを掴もうと手を伸ばしたところで、がちゃりと玄関の黒いドアが開けられる音を聴いた。すぐに向かってみれば、そこには腕を前で交差して、まるで何かをかばうかのような姿勢をしている妹がいた。少し困ったような、いや、困り果てた顔をして、それからお兄ちゃん、と珍しくこちらを窺うような声で、優奈は言った。

「ただいま、お兄ちゃん」
「どこいってたんだ、優奈・・・川にでも流されたかと思って心配したんだぞ」
「ごめんね、あの・・・あのー、・・・お兄ちゃん怒らないでね？」
「どうしたんだよ・・・怒んないよ。なにかしてきたのか？」
「ううん、その、これ」

そういって妹は濡れた手でそれを差し出した。黒く丸まったそのちいさな物体をよくよく見れば、それには三角の耳とそれから尾っぽ。まじまじと見やれば、それはぴくっと顔を上げた。驚いて手を伸ばすと、それはにゃあと鳴いて目をあけた。金色のうつくしい瞳をした黒猫だった。まだちいさくがんせない、無邪気なつくりをした子猫。優奈はばつが悪そうに視線をはずして、それから問うた。

「だ、だめ？」
「え？」
「飼っちゃ駄目？」

それは珍しくも滅多に頼みごとをすることのない、我侭などしたことのない妹からの「お願い」。彼は驚いて妹の顔を見た。彼女は最初から否定をされることを予想していたかのように口を引き締め、かなしそうに猫を撫でる。それから言い訳でもいうかのように、ぽつりと一言。

「親に棄てられてたの」
「・・・・・・・・・・・・」

その言葉に彼は口をつぐんで、それからちいさく震える子猫のやわらかそうな頭に触れた。ずぶぬれて冷たいその体は弱弱しく、親猫に棄てられたのも十分頷けるような貧弱さで妹のちいさな腕に収まっていた。棄てられた、子供。親がいなくなって、ひとりっきりで。親が死んだ子供とどちらがかなしいだろう？棄てられたほうに決まっている。ひとりは辛くて。もう戻らない最愛の人間を待ち続けて。戻らない、分かっているのにひとりよがりな期待だけは止まらずに、胸をいためるのだ。すてられた猫。親をなくした人間の子供。お似合いじゃないか、二人と一匹、身を寄せ合わせて儚いしあわせを望んで。妹の辛そうな顔が嫌でも目に入った。けれどもこれは彼女の

精一杯の我侭と優しさだ、いつもなら優奈はこんな風な同情をかけることなどなかったはずだ。手を差し伸べたくて、でも出来なくて、最初から救えないのなら手なんか伸ばしたら駄目だと分かっていながらそれでも手を差し伸べてしまったんだろう。優奈は沈黙している。その目がありありと願いを語った。お願い、と口には出さずともその表情から懇願が感じられた。彼はすこし考えて、それから舌で唇を潤してから、それから優しく問いかけた。

「飼いたい？」
「うん」
「世話が出来る？」
「うん」
「棄てたり見放したりなんかしないな？」
「うん」

その押し問答ののち、兄はぱっと顔を明るくさせた。それから驚いたように猫を抱きしめる妹の手を掴んで、あたたかさを分けるように包み込んだ。それから微笑んで、黒猫を抱きとめる。脇の下を持って抱き上げれば、宙ぶらりんになった可愛い脚がふらふらと所在なく揺れた。可愛いなあ、と頬を緩めて、それから彼は妹の頭に手を伸ばしてやさしくそれを撫でてやった。それからふらふらと視線を漂わせる妹の顔を覗きこんで、一言。

「いいよ」
「えっ！？」

その言葉に驚いた優奈は眼を見開いて、それからお兄ちゃん、と咎めるような声色でちいさく叫んだ。彼はやさしくやさしくその腕から猫を彼女に返して、それから茶目っ気をきかすような眼差しで言い放つ。

「飼っていいよ」
「ほんと！？ありがとう、お兄ちゃん！」
途端に花開くその笑顔に、滅多にないお願いごとを叶えてあげた充実感が彼を包み込んだ。ああ、よかった。喜んで貰えたんだなあ、と心ばかりに思って、それから妹の手のひらを握り締めて、笑う。身寄りのない二人はひとりぼっちの辛さをよく分かっている、救ってあげたい気持ちも分かる、可愛がりたい気持ちも分かる。せめて妹の我侭くらい聞いてあげたいのだ。彼は満足そうに頷いて、それから妹に早く玄関から部屋へと入るように促した。それから真っ白なタオルで子猫を包み込んで、ふわりと洗面所においた。あたたかなシャワーで洗い流すのは寂しさなのかかなしさなのか。いずれにせよこの猫はもう二人の家族の一員なのだ。もう他人でもなんでもない、家族。彼はふわりと猫の頭を撫でた。ぺろり、と子猫のちいさな舌が動いて指先を掠めていく。それに微笑んで、彼は妹に問いかけた。
「名前はなんにする？」
「それはねー、」
明るい声が新しい家族の名前を高らかに告げる。それから猫のほうを振り向いて、慈しむように目を細めて手を伸ばした。
「こんにちは、あたらしい家族さん」
二人は笑っている。猫はそれに答えるように、ただ一言にゃあと啼くのだった。

仔猫のワルツ（前書き）

今度はあたたかいお話です。明日より告ぐ、はあまりにも暗かったので削除いたしました。

仔猫のワルツ

流暢な音に踊る仔猫はくるりと回ってステップ踏んだ。

今日は珍しく晴れました。あたしはそれが嬉しくって笑いました。というよりも、今まで散々雨が降っていたこと自体が珍しいので、じっさいにはこれが普通ということになるんだろう。その空を見上げて、その青に声を立てずに笑ったの。透き通るような空。冬の澄み渡ったお空。それとおんなじにして低下した気温。お兄ちゃんが今日が休みで良かった、こんな風な寒さなら凍死してしちゃいそうだもん。そう思って、それから黒猫を見てあたしはもっかいえへへって笑った。あたしは猫のそのあしを掴んでゆらゆらゆわゆわと躍らせるように、自分でも何かわけの分からないことをして遊んでいる。あたしが手を動かす度に猫はもぞりと動いてすっごく可愛い。まるで子猫みたい。ううん。この子は子猫なんだから、当たり前だよね。あたしの手の動きに猫の方ももう抵抗もせずに、眠たそうにくりぬいたような大きな金色の目をうつらうつらとさせていた。耳がぴくぴくと動いて、あたしの手と連動しているみたい。かわいいなあ。尻尾の方はじれったそうにぺしぺしとほそい紐のみたいなそれであたしを叩いているから、きっと、ううん、ほんとにもうやめて欲しいんだろうなあ。でもあたしはそんなこと気にしないもん。えいってもっと脚を更に動かして面白おかしくそれを操って笑っちゃう。あ、そろそろ猫の目が半眼になってきた。「もうそれくらいにしとけ」お兄ちゃんが呆れるように声を掛けてくれたけど、それでもあたしはそれをやめたくなくて、口答え。「だって面白いんだもん」お前なあ、とお兄ちゃんが苦笑したところで、「きゃっ！？」な、なに？いたっ！や、やだ！猫が突然飛び上がってあたしの手を引っかいた。狙いは腕だ。咄嗟に顔の前に出したあたしの腕に爪が

一閃、赤い筋がみるみる滲んで、あたしの眼にも涙が滲んだ。ああ、と慌ててお兄ちゃんが立ち上がって寄ってきた。その頃にはもう猫は既に洗面所の方へと逃亡した後だった。「お兄ちゃんー…」「馬鹿。いじめすぎるからだろ」「うえー、だってえ」だってだってかわいいんだもん。そんな風に口答えしたらでこピンが飛ぶので、あたしは賢くそれを言わないままなのだけれども。

「ほら、見せてみろよ」
「う、うん…いたいー」
「当たり前だろ。引っかかれたんだから。もう、爪きり何処にやったっけ？切んなきゃ駄目だよなあ。ついでにお前も」
「あたしも？」
「ほら、傷口消毒するぞ」

あたしは平和がやってきて、それから猫がやってきて随分とこどもっぽくなっちゃった。なんだか今ではお兄ちゃんのほうがお兄ちゃんらしくて（それもあたりまえなのだろうけれども）、ちょっと可笑しい。背伸びをしていた、二人は、段々とちいさくなってきてる。もう、泣くことだって、笑うことだって、誰かのことを気にせずに出来るんだ。大人から、こどもに成長してる。言葉にするとちょっとおかしいかもしれないけれども、それがきっとふつうの成長なのかなあって思う。大人びた仮面を捨てて、こどもに戻って、それからゆっくり大人になるの。それはいいことなのかなあ？いいことならいいなあ。あたしはまだ人生を経験したことがないから、それがいいのか分からなかったけど、それでも、悪くはないと思った。うん、悪くなんかない。きっと間違えてはいない。それがあたしたちの生き方だから。お父さんもお母さんも、きっと褒めてくれる。褒めてほしいなあって、切実に思った。誰かに褒めてほしいって。お父さん、お母さん、もう居ないお姉ちゃん、それからお兄ちゃんに。そのお兄ちゃんがせっせと埃をかぶった救急箱を持ってきて、あた

しにいやあな色した消毒液をたらした。いた、い。しみるよお兄ちゃん。そう言ったら、それが消毒液だって笑われた。もう、お兄ちゃんの馬鹿。ばかばかばか。あたしの馬鹿。

みぃ。

ふと可愛らしい声がして下を向いたら、いつのまにか猫さんが戻ってきてた。それからあたしの膝立ちした足にすりついて、ごろごろ。さっきのお詫びだって言いたいのかなあ。ああ、あたしもごめんなさい。無理強いしたよね。「ごめんね」って呟けば、尻尾の振りが返された。うん、分かってくれたのかな。嬉しいなあ。あたしは笑った。お兄ちゃんも笑った。二人で笑った。それからあたしはお兄ちゃんに甘えるように抱きついた。どうしたのかってお兄ちゃんはこどもっぽく聞いた。なんでもないってあたしは舌足らずに答えた。猫がひとり取り残されて不満そうに鳴いてる。お兄ちゃんが絆創膏を貼ってくれたのが嬉しかった。なんでだろう、あの頃は、二人を失くして、途方に暮れていたあの頃は、こんな痛みなんとも思わなかったのに。痛みが飽和して、大きすぎて、他のことに気が回らなかったのかもしれない。そうなのかな、我慢して、我慢して、それでも誰にも褒めてもらえずに、あたしたちは我慢したね。なんの目的もない我慢なんて虚しかった。泣けばよかったのに。わらえばよかったのに。泣き叫んじゃえばよかったんだ。痛いってわめけばよかったんだ。思い出がつまったこの家のなにもかもが懐かしくて、けれどもほんとは辛いって正直に言っちゃえばよかったんだ。誰にでもない自分に、そう、正直に。けれども今は、もう我慢しなくてもいい。寄りかかって寄り添って、支えあうように体重をかけて、背中合わせに体温を感じて、お兄ちゃんってすがれば、それで。

「こ、こら！なにやってるの！」

油断も隙もない。猫が買ってきたばっかりのティッシュ箱をひっか

いて、中身を白陽に晒そうとしていた。あたしは叫んで、ぱっと駆け出す。それをお兄ちゃんが困ったような顔で、それでも楽しげに見つめていた。あたしは振り返った。目があった。笑われた。それも決して不快ではない笑い方で。ねえお兄ちゃん、もうお姉さんなあたしは要らないの？要らないならもうやめてもいいけれども、あたしはちょっぴり残念だよ。お兄ちゃんのお姉ちゃんみたいに振舞うの、嫌いじゃないよ。でもあたしは本当はお兄ちゃんの妹で、お兄ちゃんはあたしの兄。それでいいのかな。うん、いいね。あたしはこどもらしく、自分に正直に生きていいんだね。こんなふうにくだらないことといっぱいして、くだらないことで笑って泣いて。ああそのとき思った。くだらなくて些細な日常こそが一番大事なんじゃないかって。こんな風に積み重なる塵みたいな出来事があたしたちを形成するものなんじゃないかって。そう思ったら、すこしだけ嬉しくなった。ねえ猫さん、大丈夫だよ。あなたが付けた傷もいつか治るから。傷跡は残っても、きっと痛みはもう見えない。例えどんなに現実があたしを傷つけても、いつかその傷は完治する。治ることは痛くて痛くて泣きそうだけれども、治るからきっと痛いんだ。痛みは終わりの絶望じゃない。これから治る傷への予兆。あたしがこどもに戻るまで、あとすこし。それから、…ん？

「ああー！！」

ぼっちゃん、とあまりに切なく貧相な音が響いた。あたしは部屋を飛び出した。洗面所の奥のお風呂場を覗いたら、そこに猫がダイブしていた。ぬれねずみだ。もう、馬鹿猫なんだからってあたしはお姉さんぶるようにため息をついて、それから手を差し伸べた。あの時とおんなじ　ぬれねずみだけど、けれども楽しいぬれねずみ。乾かすのも嫌がるだろうなあって思いながら、あたしは自分の服が濡れるのも構わずに猫を抱きしめた。まるで目まぐるしく踊ってるみたいだ。不恰好なワルツを踊るみたい。あたしも猫も、踊ってる。

そういえば、まだ名前を詳しくは決めてないなあ。なんだろう？雨の日に拾われてきて、水に落ちて、それで黒いから…ううん。なんだろう。お花が好きだから、お花の名前にしようかな？それも美味しそうな名前。綺麗な花言葉。猫を乾かしながら、あたしは花言葉の本を開いた。ぱらぱらとページをめくる。この猫が来てくれてからこのお家はもっと幸せになった、もっと無邪気になった。だから、そうだ、苺にしよう。苺の花言葉は『幸福な家庭、甘い香り、無邪気、あなたは私を喜ばせる』。ぴったりだね、ってあたしは笑ってそれから初めてその名を呼んだ。この名前だって愛しかった。

「苺ちゃん」

苺はぱちぱち目を瞬かせ、それから一声にゃおんと笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4672d/

やさしい嘘を夢見るこども

2010年11月14日09時11分発行